

## 教育研究所 所蔵図書 内容紹介

ピーター・サックス著

『恐るべきお子さま大学生たち 崩壊するアメリカの大学』

(後藤将之訳、草思社、2000年)

松本 洋之

大学生の小児化が世間の話題に上って久しい。『分数ができない大学生』という刺激的なタイトルを掲げた本が出たのは1999年のことだが、その後も学業に限らず生活面全般にわたって「大学生未満」の若者が増え続けている。全国の多くの大学において「初年次教育の充実」が謳われる所以である。

本学でもさまざまな形で対策が検討・試行されていると聞く。そうした流れのなか、遅まきながら90年代前半のアメリカ大学事情の一端を伝える本書を手にした。そのタイトルもまた刺激的だ——『恐るべきお子さま大学生たち 崩壊するアメリカの大学』。オビには、「衝撃のレポート」「『アメリカの大学生はよく勉強している』の大ウソ」と、週刊誌の見出しと見紛うようなキャッチ・コピーが並んでいる。さらには、「甘やかせば授業にならない。きびしくすれば学生による授業評価でクビになる！現役カレッジ教師によるショッキングなレポート」とも。カバー・イラストも賑やかで、授業そっこのけの学生たち（化粧、ケータイ、新聞、居眠り、…）に困惑する若い大学教師が描かれている。

しかし、こうしたことは出版社の販売戦術ということで、とりあえず脇に置こう。原題は *Generation X Goes to College*——アメリカでは、1965年から80年にかけて生まれた世代を「ジェネレーションX」と呼ぶそうで（アメリカ版「新人類」といったところか？）、この世代が「大学にやって来た」というのである。当然のごとく、彼らと大学との間には齟齬・軋轢が生じた。ジャーナリストから大学教員に転身したばかりの著者（30代半ばか？）は、予想もしなかった大学の現実に直面する。彼がこれにどう身を処し、そこからどんな教訓を得たか——これが本書の内容である（236頁。原著の後半4章は省略され、最終章だけが訳出されている。末尾の「訳者解説」に省略部分の要旨が添えられている）。

以下は本書の紹介であり、末尾に私のささやかな感想を付したものである。

\*

一口に「アメリカの大学」といっても、ピンからキリまで五万とあろう。本書の舞台は「コミュニティ・カレッジ」と呼ばれる地方の公立短大である。「コンピニ大学」と揶揄され、日本人にも馴染みのハーバードやイエールといった有名大学でないのは勿論、州立などの中堅大学というわけでもない。ウィキペディアによれば、コミュニティ・カレッジは「志願者全員合格が前提」で、「高校卒業したてのいわゆる『普通』の学生が大多数」、「中には低所得者、シングルマザー、高等学校での成績が芳しくなかったが高等教育を受けたい、といった境遇にある学生達も多い」という。

この種の予備知識がないと、『アメリカの大学生はよく勉強している』の大ウソ」というコピーにミスリードされかねない（もちろん、本書も言及しているように、コミュニティ・カレッジにも意欲をもった真面目な学生がいないわけではない。ただ、少数派であるのは否めないらしい）。こうしてみると、「高等公教育について、なんらかの仮定と期待を抱いている一般の人びとには、こうした組織の内部で、実際にはどんなことが起こっているかを知る権利がある」という著者の物言いは、いささか声高に聞こえる。本書を「90年代のアメリカ高等教育の、かなり率直な現場レポート」（訳者解説より）と評するのは、ちょっとばかり言い過ぎのように私は感じた\*。

\*

それにしても、著者が直面した「大学の現実」とは一体どのようなものだったのか。本書の記述を織りまぜながら、たどってみよう。

私は、少なくとも知的な営為の場面では、かつて一度たりとも目にしたことのないものを見た。後ろの遠い列にちらばっているのは、大部分が若い男性たちで、彼らは野球帽をしばしば前後さかさにかぶっていた。彼らの制服を完璧にしているのは、一般的には、バギーパンツとチームのTシャツ、それにずうずうしい態度だった。彼らは椅子にふんぞりかえって、軽蔑と退屈の表情を浮かべて私をながめやり、まるでこう言っているかのようだった。「あんたがどこで働いてようが、どんな経験をしてようが、何を知っていようが、誰がそんなことを気にするもんかよ。なんか俺に面白いこと言ってみな」……

例の野球帽の連中が、『USAトゥデイ』のスポーツ面や、他の授業のテキストに読みふけているのだ。それも、私が話している最中に。高校時代に戻ったように、しばしばペアになっている学生たちがいた。そして、私がクラスを教えようとしているにもかかわらず、自分たちのおしゃべり会議に夢中になっていた。……

---

\* もちろん、著者にも言い分はある。彼自身、当初、コミュニティ・カレッジと四年制大学とで違いがあるのかどうか悩んだという。そこで、他大学に勤める知人の話を聞いたりするが、その結果、自らの体験が決して例外ではなく、「ジェネレーションXの教育」問題として一般化できることを確信したというのだ。

ひとりの若い女性が、教室の真ん中に座って言った。「こういう本は堅すぎます！」

……

こうして、「自分の人生を改善し豊かにしたいという動機によって、学生たちが理念と知識の追究にあけくれている高等教育の世界を期待していた」著者は、出鼻をくじかれる。「彼らは課題図書を読んでくるだろう。講義をすれば、ノートをとるだろう。授業には顔を見せるだろう。彼らは成人であるはずだから、成人として扱うことができるだろう」と考えていた「自分がどれほど純朴だったか」を痛感させられるのである。

\*

著者の担当科目は「文章執筆」と「ジャーナリズム」だった。しかし、「支離滅裂な文章を書き」「課題図書を読まない」学生たち相手の授業はなかなかうまく運ばない。唯一うまくいったのは、「学生に、雑誌や新聞やテレビ番組など、さまざまなメディアを分析・批評させ、その批評を口頭で発表させあう」方式の授業だった。「学生にグループをつくらせて、お互いの作業を批評させあう」というやり方は「便利だった。時間を使うし、学生たちを忙しくしておけるからだ」。同僚の教員が採用していたクイズ方式の授業も、(著者自身はこれに呆れるが) 学生の間では好評だったという。

やがて著者は一つの結論に達する。「すぐれた授業とは何よりも、学生の注目を集めるために何が『うまくいった』か、ということでのみ測定されるものであり、学習の実際の内容ではないのだ」と。とにかく学生の歓心を買うことによって授業を成立させる——それが、ザ・カレッジ(大学の特定を避けるためにも、またどこにでもあるコミュニティ・カレッジの一つであることを示すためにも、この呼び方がなされている)が著者にもたらした最初の見解であった。

しかしながら、著者が抱えた問題は授業をいかにして成立させるかということだけではなかった。彼自身の身分保障という個人的な問題があった。「新聞ビジネスに戻りたい」と思う一方において、著者は自らが選んだ境遇を「ゲーム」と捉え、これに勝とうと決意する。それは、終身身分保障(テニユア)を得ることに他ならなかった。

その際の最大の関門は「学生による授業評価」だった。まともな文章も満足に書けない「学生の見方は割り引いて受けとられねばならない」、学生評価は「テニユアの評価過程全体の一部にすぎない」という著者の信条は、大学当局のものではなかった。「言うまでもなく、われわれは学生評価を大いに気にしている」——審査委員会の議長はあからさまにこう言い放った。

最初の学生評価は二極化を示した。一方では、

彼はクラスに恥ずかしい思いをさせる。

このコースは、何も好きじゃなかった。

教師はものすごくそっけなくて退屈。……教師には陽気さが必要！

彼はクラスをエキサイトさせなかった。いつも眠くなったし、試験はフェアじゃなかった。

彼のふるまいかたは、あんまり面白くない。

……

他方において、

これは、たぶん、私がこれまでとったなかで、いちばん勉強になった執筆クラスだと思う。

高校にいたときよりも、文章の書き方がずっとよく分かりました。

文章を書くのがほんとうに面白くなりました！

……

著者は「学生たちのはっきりした二分化」を自覚する。そして当初は、「どうやら、あきらかに、僕はまじめな学生に向けて教えているようだ。彼らは、僕が与えているものから、何かを得ようとしている。それ以外の学生には、もがかせておくさ」と開き直るものの、それが「まちが이었다」と考え直すようになる。後者の学生の方が圧倒的に多かったからである。そして、もう一つ——テニユアを得るには、何よりも学生からの評価が高くなければならなかった。

この二つの問題に同時に応える方策は、一口に言って「学術水準の緩和」であった。大学当局もその方向に暗黙の圧力を加えた。ある同僚が著者にこう言ったという。「学生のレベルいかんにかかわらず、全学生の学習を最大化させることこそが、思いやりのあるプロの教師にとって、最大優先事項である」。

著者は自問する。「学生全員が成功するように基準を緩和するというのは、ほんとうに思いやりがあって気にかけていることなのだろうか？われわれ教育者が、準備不足の学生たちに、予備知識を与えてあげようとできるだけ努力するというのは、学生をほんとうに助けていることになるのだろうか？」——この問いに対して著者はこう答えた。「ただ無条件に、学生に与えてばかりいるのでは、教師には価値はない」。

しかし、大学を支配していたのは、著者が「世話焼きの文化」と呼ぶ空気だった。教師生活2年目に入って、著者はとりあえず丁寧な指導を心がける。「私は、彼らの記事を、どうしたら改善できるかコメントをつけたうえで、批判した。しかも全員に対して、も

っとよい評価を得るための書き直しのチャンスも与えた」。同時に、評価基準も緩くせざるをえなかった。その結果、「学生は悪態をつき、不満を言い、しばしばあまり楽しそうには見えなかったが、大事なときには大いに努力し、課題に集中した。そして、わずかずつながら、彼らの課題の質は改善されていった」。「学期が終わる少し前に、私はこのクラスに、努力に対する賛辞を与えた。……何人かの学生の表情が和らぐのに気づいた。それはまるで、どうやらわれわれが、お互いの相違を乗り越えて、ふたたびクラスとしてひとつになったかのようだった」。

この授業に対する学生評価に著者は自信をもって臨む。しかし、結果は惨憺たるものだった。

彼は助けてくれるよりは横柄で／ものすごくきびしい採点をする／それでどうしても疑問になる／  
いったいどうして／教えているのかな  
神様みたいにふるまって／とてつもない皮肉屋／そして授業には予定がなし  
ひどくきびしく／彼はがみがみと／僕たちを叱りつける  
まったく失望だよ／このクラスの／先生には  
……

この学生評価がテニユア委員会に提出されるが、幸いにも契約はもう一年更新された。しかし、「学生評価が上がらないと、テニユアは得られない」と申し渡される。評価アップの決め手は何か——それは、学生の成績を甘くすることだった。著者はこの大学で出されている平均点がBであることを教えられ、Cが当然だと思っていた自分をリップ・ヴァン・ウィンクルになぞらえる。時代は変わったのだ！しかし、それで怯む著者ではなかった。「いったいどうしたら教師として成功できるのか、私の好奇心は、たしかに頭をもちあげていた」。

\*

手始めに著者が試みたのは、学生の意識調査だった。担当するクラスの学生に、彼は以下の質問を投げかけた（カッコ内の数値は回答率）。

① 教師のもっとも重要な性質

質問：知識があるということ以外に、あなたにとってもっとも重要な教師の性質の、第一番目と第二番目のものに、○をつけてください。

- |                              |                     |
|------------------------------|---------------------|
| 1 面白い (41%、4%)               | 2 親しめる、温かい (37%、6%) |
| 3 採点が甘い (2%、6%)              | 4 学生に挑戦する (16%、24%) |
| 5 個人の学習スタイルと能力を尊重する (4%、56%) |                     |

6 要求水準が高い (0%、4%)

② 成績評価は、どんなことにもとづいておこなわれるべきか

質問：成績評価は、主として、次のことにもとづいて行なわれるべきだと思う。

- 1 どれだけ熱心にやったか (16%)      2 その課題での自分の知識と実績 (52%)  
3 はじめた地点と比較してどれだけ改善されたか (26%)      4 受講態度 (1.5%)

③ 妥当な平均点

質問：カレッジ水準の授業では、学生の妥当な平均点は何点だと思いますか？

- 1 2.0 (C) (10%)      2 2.5 (B マイナス) (35%)      3 3.0 (B) (51%)  
4 3.5 (A マイナス) (2.2%)

④ 勉強時間

質問：実際には、履修しているすべての科目について、一日にどれだけ勉強していますか？

- 1 1~2時間 (34%)      2 2~3時間 (27%)      3 4~5時間 (3%)  
4 1時間以下 (21%)      5 ほとんどしない (14%)

⑤ カレッジで成功する権利

質問：次の意見にひとつを選んで○をつけてください。学生には、成功するという基本的な権利があるのだから、カレッジでいい成績をとることが困難ではいけない。

- 1 強く同意する (4.4%)      2 同意する (17.7%)      3 反対する (59%)  
4 強く反対する (16%)

⑥ 学習の責任

質問：次の説に○をつけて答えてください。私はおカネを支払っている消費者だから、私が学習し、払ったおカネの額だけ獲得するのを保証するのは、主として私の教師の責任だ。

- 1 強く同意する (15%)      2 同意する (37%)      3 反対する (37%)  
4 強く反対する (9.6%)

それぞれの結果に対して、著者は次のようにコメントしている。

- ① 多くの学生が「ソフト」な性質を高く評価しているのは予想通りだった。2位の方では「ハード」な性質を重視する者もいるとはいえ、それよりずっと多くの学生が「個人の学習スタイルと能力を尊重する」教師を求めている。「これは、小・中・高校での最近のトレンドからもたらされた、まったく最近の傾向である」。
- ② まっとうな回答は2のはずだが、これを選んだのは半数ほどにすぎない。「残り半分は、成績はまるで実績にはもとづくべきでなく、態度や努力といった主観的な要因にもとづくべきだと答えている」。
- ③ 90%が「B マイナス以上」と答えているのは、もはや「驚き」ではない。この事態は「すべての子供が平均以上にできる」という神話にほかならない。

- ④ とはいえ、70%近くは一日に2時間以下しか勉強していない。「これは、少なくとも各単位のために毎週3時間、つまり、履修科目全体のためには毎週およそ45時間、勉強しなければならないという教師のあいだでの概算とは、対照的な数字である」。
- ⑤ 「学生には成功する権利がある」という過激な主張に、4分の1ほどの学生が賛成している。この数字は、「学生の相当部分が、自分たちの権利について、歪んだ考えを抱いていることを示唆している」。
- ⑥ 「学生の半分以上が、自分たちを消費者と見なし」ているが、「学生のあいだに相当な亀裂がある」と言わなければならない。

私の学生の多くは、自分自身に対して非常に大きな期待をもっていたが、その高い目標を達成するために——とにかく学校では——あまり熱心に勉強していなかった。他の商品やサービスを買うのと同じように、自分自身をカレッジの消費者と見なして、彼らは、自分が成功するかどうかについての責任の多くを、自分自身の知識や技能や実績ではなく、むしろ教師としての私や、教育システムそのものに置こうとしていた。

\*

他方において、教師は「学生のためのソーシャルワーカー」ではない、という信念を著者と共有する同僚は多くいた。学生の学術水準をめぐる意見交換の場がもたれたことをきっかけに、学内に「われらが学術水準を救おう委員会 (SOS)」<sup>セーブ・アワ・スタンダーズ・コミッティ</sup>が立ち上げられ、著者はそのメンバーとなる。しかし、管理職の見解は違っていた。「学生を集め、維持しておくために、ザ・カレッジはもっとビジネスのようにふるまわねばならない」、「われわれは、顧客に対して、よりよくアピールせねばならない」、「われわれは、学生を消費者として、サービスにつとめねばならない」。入学条件を厳しくしようとするSOS委員会に対して、条件をいっそう緩めるという通達が出される。

著者は、「学術水準の維持」と「学生消費者との友好関係」とのバランスに苦慮する。「基準をゆるめてもよいということは、満足した学生顧客が多くなることを意味し、それは入学者数が増えることを意味し、そしてそれは、自分の職を失う可能性が小さくなることを意味して」いたからである。そして、ついに決定的な転換をはかるに至った。「学術水準と採点に関して、以前と同じ頑固な道をとっていたら、解雇されるのが分かっていた。……私は確信した。1990年代のアメリカで、教師として成功したいのなら、私もまた、学部の全員が直面した圧力に、折れなければならないのだ」。

こうして、著者のいう「お砂場実験」が始まった。それは、「幼稚園の保母さんみたいになって、僕の授業がお遊び時間みたいになるように、できることはなんでもする」、たとえば「レストラン評と映画評をしたため、スポーツについて記し、多くのゲストスビ

「カーを招き、宣伝コピーを書く」というような、「恥じらいもなく大衆文化をとり入れ、また、この世代がもつ面白がらせてほしいという欲求にも迎合する」というものだった。さらには、学生と対等の立場に身を置いたり（自分をファーストネームで呼ばせた）、驚くほどよい点を与えたりもした。「学生はよい成績とハッピーな顔の教師には肯定的に反応するだろう」というわけである。

「お砂場実験」の成否を決するのは、無論、学生による授業評価である。結果はとてよかった。次の学期も、著者自身はひどい授業だったと思ったというが、「評価は、かつて私がザ・カレッジで受けとった最高のものだった」。(もっとも、レベルを落としすぎたためか、「この教師は、素材をよく把握していないようだ。彼にこのコースを教える資格があるとは思われない」というコメントもあった。)

やがてテニユア委員会と対決する時期が訪れ、著者はレポートを提出する。そこに彼が記したのは——「自分は、1990年代の学生たちに何が期待できるか、そのはっきりした考えもなしに、ザ・カレッジでの仕事を始めた」、「私は、自分のアプローチを完全に変えた」、「学生評価に示された結果にはほんとうに勇気づけられた」という内容だった。著者自身には「まるで真実には響かなかった」けれども、委員会は大成功だった。「数ヶ月後、私はテニユアを与えられた」。

\*

以上が、本書の大部分を占める、著者の「混乱と困惑の物語」の概略である。最初に述べたように、この後、原著では「90年代の高等教育の現状を生み出した、いっそう大局的な社会・文化変動がテーマ的に論じられている」（訳者解説より）そうだ。これを受けて、本書にも採録されている最終章「これからの大学にできること」では、〈モダニズムvs.ポストモダニズム〉という観点から著者の大学論が展開されている。すなわち、「われわれが知っているような〔伝統的な〕教育は、ポストモダン時代にはもはや適切ではない」として、著者は「教育者たちは、『教室』の概念を完全に考え直す必要がある」、「ポストモダニティにおいては、教室とはほとんど文化的な『テキスト』でしかなく、その内容と意味は、教師と学生の双方によって創造されるのである」とする。具体的には、「教師からCD-ROMまで、あらゆるもので提供される学習素材を使って、何か新しいものを創造し、学生に知識を使わせるための、単なるスペース」、それが教室だというのである。その場合、教師の役割も「情報の伝達者」ではなく、「専門コンサルタント」のようなものになる、と言う。すなわち、「情報収集の道具の使用法について学生をガイドする」と同時に、「機会やデータベースからでは得られない、学問の微妙な複雑さを理解できる

よう学生を刺激しながら、彼らが知識を検討するための新しい方法を想像することを援助する」——この二つの役割が教師には期待されるというのだ。キーワードは「知識」から「想像力」へと変わらねばならない！

ここで、こうした著者の主張を丁寧に追う余裕はない。ただ、目下の問題が、いつの時代にも見られるようなジェネレーション・ギャップに起因するものではなく、「モダンな世界とポストモダンな世界の分裂」として捉えられている、ということを確認しておこう。大学が今日抱えている諸問題は、詰まるところ、「ポストモダン」の人間が「モダン」な理念・制度に縛られていることから生じている、と著者は考える。「私はいまでは、学生こそが、誰にでも高等教育を受ける権利があるという考えにもとづいて成立したシステムの、ほんとうの犠牲者だと信じている」——エピローグに登場するこの一文に、最終的に著者が到達した境地が物語られている。

\*

正直言って、私には最終章の議論には付いていくことができなかった。それは、「ポストモダン」についての私の理解が不足しているためであろうが、「モダン」からの逸脱をいきなり「ポストモダン」現象と見なす一般的傾向に胡散臭いものを感じるためでもある。大学生生活に限らず、今日の若者たちのさまざまな風俗がはたして「文化」と称するに足るものなのかどうか（本書は「世代のあいだの文化戦争」という言い方をしている）、かなり疑わしいものがある。たしかに、現代社会の閉塞は近代的な価値の再考をさまざまな仕方で促した。しかし、そうした否定性に止まる限り、「ポストモダン」はいまだ「モダン」に拮抗する自律的な地位をもたない。そして、若者たちの風俗はその最たるものであるという一面を免れないのである。

本書は、一人の若きアメリカ人が「よい大学教師」でありたいとして、自らの体験を真剣かつ赤裸々に記した報告であるけれども、そして同じ大学人として同感・共鳴する部分が多々あるけれども、大学教育における重要な側面を見過ごしていると言わなければならない。それは、学生たちがまさに人格形成の途上にあり、彼らの教育においては知識や技能の修得と人格形成とが分かちがたく結びついている、という視点である。著者の描く将来の大学生像から浮かび上がるのは、すでに精神的にある程度の自律を示し、（たとえ教師の援助を必要とするにしても）自らの能力と責任において学習を遂行しうるような若者である。しかし、そうした要件を決定的に欠くと思われる学生たちが相手ではなかったのか。そうした学生を相手にするとき、幼稚園児の世話を焼くようなやり方は、彼らの依存性を助長するものではあっても、決して自律性を育むものではないであ

ろう。彼らに必要なのは、人格的な触れあいを通しての知識・技能の伝授である。この触れあいはおそらくマニュアル化することができないし、彼らのレベルに合わせることによって果たされるものでもない。かりに教師と学生との間では「文化戦争」が避けられないとしても、そこで武器となりうるのは知識量でも技術力でもく、人間としての力量であるはずだ。圧倒的な力量に触れることによってこそ、学生たちは知識や技能にとどまらない自らの生きる糧を得ることができる。そして、それを通して、文化の継承もおこなわれるのである。大学における知の営みには、いかなる分野においても、何らかの形で〈歴史性に対する敬意〉が含まれている。これを失った大学教育は、たとえポストモダンの時期を迎えても、「大学教育」の名に値しないだろう。

とはいえ、ここでこれ以上の大風呂敷を拡げるつもりはない。私が言いたいのは、個々の問題への即効的対処という形では今日の大学事情を好転させるのは困難であるということ、「よい大学教師」とは一個の人格としての力量と資質を備えた人間ではないのかということに尽きる。その場合、大学教育がエンターテインメントとは異質なものとなることは必然であろう。たしかに、大学における学習・教育はどこかに「楽しさ」を内包している。しかし、それはエンターテインメントが提供する「楽しさ」とはまったく別物なのである\*。

\*

以上の感想が正鵠を得ているかどうかとなると、はなはだ心許ない。アナクロニズムにすぎる、とも言われそう。それを承知で、あえて不十分な感想を付した次第である。

2007年春、団塊世代の定年退職開始とともに、大学全入時代の到来が話題となった。本書の舞台であるコミュニティ・カレッジの現実が、いつ本学の現実となるとも限らない——いや、部分的にはすでに現実となっているのかもしれない。では、私たちには何が求められるのか。「分かりやすい授業」「懇切な指導」といったことがしきりに言われる。しかし、そうした対応の重要性は今に始まったわけでもないだろう。今様の学生を「ポストモダン」と評するのは寛容にすぎる。ある種の非寛容にこそ大学——広くは、文化——の存在理由があり、教養が云々される根拠がある、とすることができる。こうした点での吟味が本書に見られなかったことは残念であった。

---

\* この紹介文を準備している最中、ある新聞コラムに接した。「教師はエンターテイナーでなければならない」として、生徒に「分かる楽しさ」を伝えようと頑張ってきた中学校の英語教諭が、今春から大学教授に転身する、という話題だった（朝日新聞、2月22日）。「ピートルズの曲で構文を教え、カルタを使ってスペルと発音の関係に気づかせる。生徒同士が英語で問題を出し合う『90秒クイズ』も人気だ。チャイムが鳴っても、『もっと教えて』とせがまれる」——コラムはこう綴っていた。こうしたやり方が中学生相手に大きな効果を発揮したことは十分に想像できる。ただ、大学の場で「もっと教えて」はないだろう、というのが正直な感想だった。